中国における佐藤春夫作品の翻訳と受容
―戦前の翻訳を中心に（1921～1937）

李　天然

はじめに

日本近代作家の中で、佐藤春夫は中国と特に深く関わっている一人といえる。彼は中国文学に強く関心を持ち、中国近代作家とも頻繁に交流していた。そして佐藤春夫の作品も 1920 年代から中国語に訳され、その翻訳は 1921 年の周作人訳「雉子の炙肉」を皮切りに 1920 年代から 1930 年代前半にかけて盛んに行われていた。ところが同じ大正期の重要作家で佐藤春夫の親友でもある谷崎潤一郎と芥川龍之介に比べて、佐藤春夫作品の中国語訳に関する研究はあまり見られない。王向遠の『二十世紀中国日本文学翻訳史』（北京師範大学出版社、2001 年 3 月）のなかに佐藤春夫について触れた一節があるが、その中には査士元、李漱泉（田漢）、高明、査士驥という四人の訳者しか言及していない。[1] その他に翁家慧の「中国文壇における日本唯美主義の翻訳と受容―民国期の田漢、郁達夫、周作人を例に」[2]（『日本教育と日本学』、2018 年 1 月）や荊紅艶の「田漢の外国文学翻訳」[3]（『哈爾浜師範大学社会科学紀要』、2016 年 1 月）のように訳者を中心にする研究の中で佐藤春夫に言及する場合があるが、佐藤春夫の中国語訳を全般的に扱う研究は管見の限り存在しない。従って本稿は戦前における佐藤春夫作品の中国での翻訳と受容の全体像を示すことを試みたい。

一、戦前における佐藤春夫作品中国訳の概観

筆者は「全国報刊索引」と「中国歴史文献総庫」のデジタル資料を用いて戦前における佐藤春夫作品の中国語訳について調べた結果を図表１にまとめた。[1)]

図表１．戦前における佐藤春夫作品中国語訳一覧表

戦前における佐藤春夫作品中国語翻訳一覧表（新聞と雑誌）				
訳名	訳者名	翻訳掲載誌名	原作名	原作初出
雉雞的燒烤	仲密	『晨報』(1921年7月9日～7月10日)	雉子の炙肉	読売新聞(1916年11月12日)
初春底一日	鳴田	『民国日報･覚悟』(1921年9月9日)	春浅き日に	新潮(1921年5月)
形影問答	仲密	『晨報副刊』(1922年1月8日)、『民国日報』(1922年1月15日)	形影問答	改造(1919年8月～12月)
殉情詩抄	張定璜	『語絲』(1924年12月12日)	殉情詩集(一部)	改造社(1921年7月)
李鴻章	湯鶴逸	『晨報副刊』(1926年9月27日)	李鴻章	改造(1926年7月)
從佐藤春夫的殉情詩集	田漢	『中央日報特刊』(1928年2月29日)	殉情詩集(一部)	改造社(1921年7月)
呵呵薔薇你病了:日本近代小品文**选**之二	謝六逸	『大江月刊』(1928年11月15日)	病める薔薇	黒潮(1917年6月)
某女之幻想	査士元	『新月』(1929年4月10日)	ある女の幻想	中外(1917年12月)
星:第一折……	張我軍	『河北民国日報副刊』(1929年6月11日)	星	改造(1921年3月)
厭世家的誕生日	馮厚生	『南開双周』第6巻第1期(1930年)	厭世家の誕生日	婦人公論(1923年6月)
女誡扇綺譚	蕭林	『学生雑誌』第17刊第4期～8期(1930年4月～8月)	女戒扇綺譚	女性(1925年5月)
指紋	金溟若	『小説月報』第21巻第3期(1930年3月)	指紋	中央公論(1918年7月)
論描写	謝六逸	『中学生』1930年第9期(1930年10月)	小説作法講話	文章倶楽部(1927年11月～28年3月)
一夜之宿	査士元	『東方雑誌』1931年第28刊第10期(1931年5月25日)	一夜の宿	中央公論(1923年6月)

戦前における佐藤春夫作品中国語翻訳一覧表（書籍）				
書名	訳者	出版社名	出版年	所収作品
都会的憂鬱	査士元	華通書局	1931年3月	都会的憂鬱（都会の憂鬱）
佐藤春夫集	高明	現代書局	1933年8月	星（星）、開窗（窓開く）、阿絹及其兄弟（お絹とその兄弟）、一夜宿（一夜の宿）、瀬沼氏的山羊（瀬沼氏の山羊）
田園之憂鬱	李漱泉（田漢）	中華書局	1934年7月	田園之憂鬱（田園の憂鬱）、阿絹和她的兄弟（お絹とその兄弟）、殉情詩集（殉情詩集）
更生記	査士驥	中華書局	1935年3月	更生記（更生記）

戦前における佐藤春夫作品中国語翻訳一覧表（作品集の収録）				
書名	訳者	出版社名	出版年	所収佐藤春夫作品
現代日本小説集	周作人	商務印書館	1923 年	我的父親与父親的鶴的故事（私の父と父の鶴との話）、黄昏的人（たそがれの人間）、形影問答（形影問答）、雉雞的燒烤（雉子の炙肉）
近代日本小品文選	謝六逸	現代書局	1929 年	呵呵薔薇你病了（病める薔薇）
日本現代名家小説集　第一巻	査士元	中華書局	1930 年	某女的幻想（或る女の幻想）
日本現代名家小説集　第二巻	査士元	中華書局	1934 年	厭世家的誕生日（厭世家の誕生日）

表に示されているように、戦前における佐藤春夫作品の中国語訳は 1921 年に周作人が仲密というペンネームで訳した「雉鶏的焼烤（雉子の炙肉）」からはじまり、1935 年の査士驥訳『更生記』を最後に、14 年間にかけて行われていた。その詳細についてみると、以下の二つの問題が浮かび上がってくる。すなわち 1910 年代後半ですでに日本での文壇的地位を確立した佐藤春夫がなぜ 1920 年代に入ってからようやく中国語に翻訳され始めたのか、そして 1920 年代にかけて新聞や雑誌に多く掲載されていた佐藤春夫作品が 1931 年以降突然消えたのはなぜなのか、という二つの問題である。

以上の問題を単一原因に帰結することは無論あり得ない。その原因を究明するためには、少なくとも佐藤春夫本人の創作活動や中国作家との交流、中国文壇の動向、さらには日中両国を取り巻く時局を考慮に入れなければならない。従って本稿は上に述べた要因を中心に、佐藤春夫作品の中国訳を三つの時期に分けて考察を加え、以上の二つの問いに答えることを試みたい。

二、戦前における佐藤春夫作品の翻訳と受容の三つの時期

第一時期（1920 年の台湾旅行から 1927 年の江南旅行まで）

佐藤春夫の作品を一番早く中国語に訳したのは五四運動後に中国文壇で牛耳を執る地位に立つ周作人である。彼はまず 1921 年に佐藤春夫が『論語』から材を取って創作した「雉子の炙肉」を訳して当年 7 月 9 日と 10 日号の『晨報』に発表した。訳文の後には次のような短い紹介文が附されている。

> 佐藤春夫（Sato Haruo）一八九一年生まれ、『田園の憂鬱』の著者としても有名である。この短編は小説集『お絹とその兄弟』より選んで訳出した。
>
> 文中に理解に難があった場所は HS 君に説明してもらい、ここで礼を申し上げる。
>
> 一九二一年七月六日記[4]

以上の文を読むと、周作人は作品を翻訳するだけでなく、佐藤春夫という新興作家を中国文壇に紹介する意図があったことは明らかである（なお、実際には佐藤春夫は一八九二年生まれである）。周作人が佐藤春夫の代表作が『田園の憂鬱』であることを知りながら敢えて『論語』から材を取って創

作した「雉子の炙肉」を選んだのは、台湾旅行によって確立した佐藤春夫の中国文学愛好家の名声に目を付けた可能性が高いと思われる。

佐藤春夫は1920年7月から10月にかけての台湾、福建に旅行し、この旅の中で実際の中国を初めて目にすることができた。その後佐藤春夫はこの旅に因んだ随筆、小説を次々と発表して、日本においては外地文学の代表作家と見なされるようになる一方、中国作家の間では中国文化の理解者と評価されるようになった。このことは、佐藤春夫の作品が翻訳されるようになるきっかけの一つだと考えられる。

周作人による佐藤春夫の紹介は早くも反響を呼び、1921年9月9日の『民国日報・覚悟』に鳴田訳「初春底一日（春浅き日に）」が掲載された。鳴田は文末の附言の中で佐藤春夫を紹介しながら、周作人訳「雉子の炙肉」への言及もみられる。

> 佐藤春夫の小説は、この前に仲密先生による訳が一篇ある。彼は日本で浪漫主義者と称され、作品に唯美的、詩人的な傾向が著しい。その中で最も有名なのは『田園の憂鬱』である。彼は慶応義塾に入ったがその後中退した。その詩人の気質は世と相容れず文壇でも不遇者である。[5]

朱鳴田（鳴田）が用いた「唯美的」「詩人的」という表現は、当時日本文壇における佐藤春夫評価をそのまま引いており、後に中国における佐藤春夫評価のキーワードともなった。翻訳が掲載された1921年に佐藤春夫は既に日本文壇の風雲児となっているので、「世と相容れ」ない「不遇者」というのは恐らく『田園の憂鬱』から得たイメージであろう。ちなみに鳴田は1921年頃『民国日報』に頻繁に文章を載せたが、それはほとんど国際政治や労働問題に関するもので、唯一の文学作品が「春浅き日に」である。上の附言の周作人（仲密）への言及からみると、朱鳴田がこの時期に佐藤春夫に特別関心を持っていたことは、明らかに周作人による翻訳と紹介と関係している。

翌年周作人は佐藤春夫の短編小説集『美しき町』（天佑社、1920年1月）から「形影問答」を訳出し、1922年1月8日の『晨報副刊』に発表した。文章に附された「訳者の言葉」の中で周作人は鳴田の翻訳に言及している。

> 佐藤春夫は一八九一年生まれで、現代日本における詩的小説家の一人であり、主な著作は「田園の憂鬱」等五種がある。私が以前訳した「雉子の炙肉」は去年に本紙で掲載され、また『覚悟』誌上に鳴田訳「春浅き日に」が掲載されている。今回訳した短編は小説集『美しき町』より選んで訳出した。フランスのボードレールの「月の恩恵」（私の訳文は今年の春に上梓する予定の訳詩集『私の華髪』に入っている）を参照しながら読むといい。
>
> 一九二二年一月五日附記[6]

鳴田と周作人の附記における相互言及から見れば、二人は明らかに佐藤春夫作品を翻訳する際に互いの存在を意識している。そして周作人は早くも佐藤春夫作品とフランス文学との関係を指摘し、比較文学的な読み方を提示した。

1923年6月に周作人と魯迅共著の『現代日本小説集』が商務印書館から出版された。この作品集は魯迅と周作人が翻訳した15人の日本作家の作品が収録されているが、その中には佐藤春夫の作品

が「雉子の炙肉」と「形影問答」の他に同じく周作人訳の「我的父親与父親的鶴的故事（私の父と父の鶴との話）」と「黄昏的人（たそがれの人間）」が収録されており、作品集の中で一番多く作品が収録された作家である。このことに加えて、周作人が張我軍訳の夏目漱石『文学論』（神州国光社、1931 年 11 月）に寄せた序言と合わせてみれば、周作人の佐藤春夫作品に対する愛着が明らかである。

> 私は『猫』が一番好きで、他にもいいのがあると思う。私がいいと思ったのは、その作品の意味が特別深いためではなく、一度読むと手放すことができないような魅力を感じたからである。夏目以外にそのような作家はあまりいないが、後輩の中では志賀直哉がその風味を会得しているとみえ、その次は或いは佐藤春夫かもしれない。[7]

というふうに、周作人は佐藤春夫を夏目漱石の持つ「風味」を受け継ぐ作家の一人として高く評価している。この事情を踏まえてみれば、後に佐藤春夫の作品を翻訳した訳者の中に周作人の近辺にある人が多いのも納得できるだろう。

鳴田と周作人はともに佐藤春夫の詩人の気質について言及しており、二人とも翻訳する際に「詩的」な散文を選んだが、佐藤春夫の詩が実際に訳されたのは散文より三年遅れて 1924 年のことである。

1924 年 12 月 12 日『語絲』に張定璜訳「殉情詩抄」が掲載された。張定璜は周作人と親交を持つ文学者の一人で、彼が佐藤春夫作品を翻訳したのは周作人の影響による可能性が大きい。

ここまでの考察から見るに、初期の佐藤春夫翻訳は周作人を中心に行われており、佐藤春夫について紹介する際は彼の中国趣味及び詩人気質の呈示に重きを置いていた。ところが 1926 年 9 月 27 日『晨報副刊』所載の湯鶴逸訳「李鴻章」は前人の観点を踏まえながら佐藤春夫の創作手法に疑問を投げかけている。

> 佐藤春夫は日本現代詩人で、その作品は詩情に富んで味わい深い。氏は中国文学によく通じていて、中国の物語を下敷きに創作した作品が特に面白い。氏は一八九二年生まれで、今年三十四歳である。彼は日本和歌山県生まれで、今は東京小石川音村町九、十八に住んでいる。本作の原作は七月に出た『改造』の「現代中国号」に載っている。書かれているのは事実なのか？私は敢えて評価しないでいよう。嘲弄なのか？風刺なのか？賢い読者諸君は自ら判断するだろう。
>
> 一九二六、九、北京[8]

ここで湯鶴逸は佐藤春夫の中国趣味及び詩人気質を指摘しながら、この小説が事実であることに疑問を投げかけ、作品を一種の「嘲弄」と「風刺」と見なしている。「李鴻章」のように実在人物や事件に基づくフィクションを創作するというのは佐藤春夫の中里村時代の作品から一貫してみられる手法であるが、このような手法の使用は内容によって当人から咎められるリスクが伴うことは言うまでもない。実際佐藤春夫と田漢との関係が遠くなったのは後者の訪日の材料に「一旧友」を創作したからで、彼が戦時中に創作した「アジアの子」も郭沫若および郁達夫との決裂の原因となった。佐藤春夫のその詩人の目に映る「事実」は、しばしば彼と中国作家との間に亀裂をもたらした。

以上は第一時期における佐藤春夫作品の中国訳について概観した。以上に述べた通り、初期の佐藤

春夫作品の中国語訳は周作人を中心に行われていた。張定璜訳「殉情詩抄」を除けば、この時期における訳文はほとんど佐藤春夫に対する紹介が附されており、彼の中国趣味と詩人的気質とが紹介の重点となっている。

第二時期（1927 年の江南旅行から 1931 年の満州事変まで）

前述のように、佐藤春夫は 1921 年頃から中国作家と交友関係を持つようになったが、その交友関係が一つの頂点に達したのは 1927 年の江南旅行においてである。この年の六月、佐藤春夫は国民党宣伝部に任職した田漢を東京の自宅に招待し、そこで田漢の誘いを受けて 7 月 15 日から 8 月 3 日まで上海、杭州、南京、蘇州など江南の名勝を遍歴した。1920 年の台湾、福建旅行と違って、当時の中国出版業の中心である上海に訪れた佐藤春夫は当時の中国文壇を代表する作家たちと直接交流する機会を得た。

佐藤春夫の江南旅行は彼の中国文壇における知名度を高めただけでなく、作品の翻訳にも拍車をかけることとなった。1927 年の江南旅行から 1931 年 9 月 18 日の満州事変までの間は民国期において佐藤春夫作品が最も多く翻訳された時期で、新聞と雑誌に掲載された佐藤春夫作品の中国語訳は九つ存在する。

佐藤春夫が江南旅行から帰った五か月後、1928 年 2 月 29 日の『中央日報特刊』で田漢訳の「従佐藤春夫的殉情詩集（佐藤春夫の殉情詩集より）」が掲載された。訳文の前に附された説明によると、これは佐藤春夫から贈られた『殉情詩集』の序文に基づいて訳したものである。説明文の冒頭にはやはり佐藤春夫に対する紹介が置かれており、彼の詩人気質と中国趣味に言及している。ところが田漢は自分と佐藤春夫との交友について触れた際に、佐藤春夫の「一旧友」に対する不満もこぼしている。

> 『中央公論』に掲載された氏の「一旧友」を読んだ。作中に「田漢」と記されている人物は、必ずしも田漢ではない。作中には、作者の観察力を疑わせるような箇所が所々ある。例えば私が昨年東京を訪れたのは、心の廃墟を探る傍らに旧友を訪問するためであったが、氏は私が政治部藝術顧問の肩書を得て第二の故郷に衣錦還郷のつもりで行ったと誤解している。また私の政治上の立場を誤解して、私が私怨のために友を敵に回したと書いている。芸術家は一瞥にして人性の真実を捉える能力を備えているはずだが、私が佐藤との付き合いが長いだけに、この作品を読んで知己の得難いことを歎ずるのを禁じ得ない。[9]

上の段落から「一旧友」の発表に伴って田漢と佐藤春夫との間に生じた亀裂が明らかに認められる。ところが佐藤春夫に個人的な不満を抱く田漢は、同時に芸術の面における前者への尊敬をも表していた。彼は前述の序文の中で佐藤春夫訳『揚州十日記』に言及し、「数百年前の惨史が佐藤君の同情に富む美しい筆触で訳出される以上、作品が読む人々に感動を与えることに疑いがない」とその訳筆に称賛しながら、自分の「殉情詩集」序文の訳について「その詩序の文筆縹渺たること、田漢のようにガサツで文筆に通じないものが及ぶものではなく、ここではその大意を記すだけである」と述べている。[6]

1928 年 11 月 15 日の『大江月刊』に謝六逸訳「呵呵薔薇你病了（病める薔薇）」が掲載された。謝六逸は中国新聞業の先駆者として知られているが、彼は日本文学翻訳者としても多くの業績を残して

いる。謝六逸は1918年に早稲田大学政治経済学科に入学し、1922に卒業する後は商務印書館に編集として入った。留日経験を持つ謝六逸は、日本文学を中国文学の学ぶべき模範と見なしている。彼は1927年前後から芥川龍之介、薄田泣菫、志賀直哉など日本有名作家の作品を作家の紹介を兼ねて商務印書館の『小説月報』や『大江月刊』で発表し、その後それら訳作のほとんどを『日本近代小品文選』に集結して出版した。「病める薔薇」も彼が日本文学紹介に集中した時期に訳した作品である。

「病める薔薇」の最後にはやはり佐藤春夫に対する紹介が添えられている。「病める薔薇」は佐藤春夫の代表作『田園の憂鬱』の前身であることは周知のとおりであるが、『田園の憂鬱』自体は1927年時点でまだ中国語に訳されていない。謝六逸は附記の中で「この訳文を読めば、『田園の憂鬱』の作風も想像しがたくないだろう」と、比較的に短く雑誌に載りやすい「病める薔薇」を翻訳することによって読者に『田園の憂鬱』の雰囲気を伝えるという意図を述べている。彼は1930年に佐藤春夫の『小説作法講話』の一節を「論描写（描写について）」と題して当年十月号の『中学生』で発表しており、佐藤春夫の文学論を最初に中国語に訳した人でもある。

謝六逸の後で佐藤春夫の作品を翻訳したのは同じく日本文学翻訳者として名高い査士元である。査士元はその兄弟の査士驥と共に上海東亜同文書院で日本語を学んでおり、当時の日本文学翻訳者の中では稀な日本留学経験を持たない一人である。彼は佐藤春夫に直接会ったことがなかったが、1927年から佐藤の動向に注意を払っていたようである。1927年佐藤春夫の江南旅行の際に彼は「佐藤春夫的形象（佐藤春夫のイメージ）」という文章を書いて8月8日の『申報』に発表した。この文章の中で彼は伊福部隆輝の文章を引用して日本における佐藤春夫の評価を紹介した。また佐藤春夫と谷崎潤一郎の「細君譲渡事件」が1930年8月20日の『申報』に報じられた4か月後、彼は「佐藤千代谷崎三人恋愛事件雑感」（『中国新書月報』、1930年12月）という題で評論を書き、文末に佐藤春夫の「秋刀魚の歌」の訳も添えてある。この詩の他、査士元はまた佐藤春夫の「或る女の幻想（某女之幻想）」（『新月』、1929年4月10日）と「一夜之宿（一夜の宿）」（『東方雑誌』1931年第28刊第10期、1931年5月25日）を翻訳している。「或る女の幻想」の原作は1917年12月号『中外』に掲載されており、査士元によって訳されるのはその12年後のことである。この小説はポー風の探偵小説の作風を示す一方、少年佐藤春夫に大きな衝撃を与えた大逆事件もストーリーに組み込まれており、佐藤春夫の社会主義に対する関心を露呈している一作で、「一夜の宿」は「お絹とその兄弟」の延長線上にある作品といえる。

さらに1931年3月に査士元訳の『都会の憂鬱』が華通書局から出版された。これは中国で佐藤春夫作品が書籍として一番早く出版されたものである。この翻訳の中には訳者の言葉が附されていないが、書籍の最後に同氏訳の谷崎潤一郎『悪魔』の広告が載っている。前述『中国新書月報』所載の雑文からみれば、査士元が1930年前後に佐藤春夫と谷崎潤一郎の作品を集中的に訳出したのは、二人が細君譲渡事件によって得た知名度を利用しようとする商業的考慮も含まれていると考えられる。

上に既に述べた通り、佐藤春夫が中国において注目され始めた原因の一つは彼が台湾、福建旅行の際に創作した外地物であるが、その外地物を初めて中国語に翻訳したのも台湾出身の作家張我軍である。張我軍は台湾新文学運動の主将の一人で、1901年に台湾板橋に生まれ、1926年に北京へ渡って、周氏兄弟など大陸文人と親交を持つようになった。彼は1926年から日本文学の翻訳をはじめ、1929年に佐藤春夫の『星』を翻訳し、6月11日から17日にかけて『河北民国日報副刊』に連載した。文人として周作人の傘下にいた張我軍が佐藤春夫の作品に着目したのは恐らく周作人の影響を受けたか

らであろう。ところが彼は周作人の佐藤春夫評価をそのまま受け入れている訳ではない。6 月 17 日の連載最終回の後ろに附されている「訳者の言葉」の中で張我軍が徹底的に佐藤春夫を「詩人」として位置づけた点が注目に値する。

> この小説？は閔南の故事伝説を下敷きにしているが、十中八九は作者の想像だということは言うまでもない。佐藤氏の作品の価値はもっぱらその詩の味にある。日本の批評家も口を揃えて佐藤春夫が詩人だという。この作品を読めば、彼の作風は想像しがたくない。彼の小説は、長詩そのものである。したがって翻訳するのは至難の業である。私の筆でその真意を伝えることは難しいが、この訳文を読んで不満足と思う読者が居れば幸いである。なぜなら原文の優美且つ詩情に満ちていることは、私が身を以て保証する。[10]

既に述べた通り、張我軍以前の訳者は佐藤春夫の作風について紹介する時に「詩情」を強調することが多いが、佐藤春夫を小説家と詩人のどちらと見なすかという点において微妙な違いがみられる。周作人が「詩的な小説家」という語を使っており、鳴田は詩人とも小説家とも言わず、ただ作品に「詩人気質」を持つ「不遇者」だとまとめている。湯鶴逸と田漢は一歩進んで「詩人」という語を用いたが、佐藤春夫の創作に関して純粋の詩の他に「詩的な小説」の存在も認めている。ところが上の「訳者の言葉」の中で、張我軍が「小説」の後に敢えて「？」を付け加え、また佐藤春夫の小説を「長詩そのもの」と述べ、作品の散文としての一面を徹底的に否定している。周作人以降の評価の中に見られる「詩人的」から「詩人」への移行は、張我軍の評価で一極に達したと考えられる。

張我軍と同じく周氏兄弟と関係の親しい金溟若もこの時期に佐藤春夫の作品を翻訳した。金溟若と張我軍の日本文学翻訳は明らかに周作人に大きく影響され、思想面で白樺派の人道主義に接近しつつ佐藤春夫にも興味を示している。金溟若訳の「指紋」は 1930 年 3 月の『小説月報』に掲載されている。この作品は佐藤春夫の前期作品の中で特にポーの探偵小説による影響を前面に出している作品で、金溟若による「指紋」の中国語訳は査士元訳「或る女の幻想」と共に佐藤春夫の探偵物の作風を当時の読者に示した。

これまでの翻訳は全て新聞及び文芸誌に掲載されていたが、1930 から学生を対象とする雑誌においても佐藤春夫作品が見られるようになった。まずは 1930 年 4 月から 8 月にかけて商務印書館が発行する『学生雑誌』に蕭林訳『女戒扇綺譚』が連載された。続いて 1930 年 8 月に発行された南開中学の学生雑誌『南開双週』（第六巻第一期）誌上に、馮厚生訳「厭世家的誕生日（厭世家の誕生日）」が掲載された。訳文自体は不自然な表現や読む際に理解に苦しむところが少なくないので、中学生の訳者馮厚生は日本語の原文を完全に理解できていないと思われる。特に 1934 年十一月に出版された査士元の『日本現代名家小説集（第二巻）』に収録されている同作の訳と比べれば語学力の差が歴然である。ところが馮厚生の訳文の後に附されている「京平」という編集者による附記は注意に値する。

> 作者は心理描写に重きを置き、躊躇うような筆触で、幻影への憧憬を描いている。象牙の塔の美しさに憧れながら、十字路頭に立つ悲哀を生きている。馮君の翻訳は流暢で修飾を加えず、古色天然にしてみずから妙文を成す。その味わいの深さを、読者諸君には会得できるだろう。
>
> 京平志。二十六夜半[11]

以上の附記において、京平はそれまでの訳者たちによって繰り返しなされた「詩情」を中心とする常套句を用いた評価とは違い、短いながらも作品自身に対する批評を試みた。このような批評が文壇から比較的遠ざかった学生雑誌において初めて試みられたことは、ある意味自然といえるのかもしれない。このような中学生による翻訳の出現は、佐藤春夫の影響が既に文人の間に限られていないことを明らかに示している。

第三時期（1931 年の満州事変から 1937 年の盧溝橋事件まで）

以上の通り、佐藤春夫の作品は 1921 年から中国語に翻訳され、1920 年代にかけて新聞や雑誌に多く掲載された。ところが 1931 年に『東方雑誌』に掲載された査士元訳「一夜の宿」を最後に、佐藤春夫作品は 13 年間にかけての間に新聞や雑誌に姿を消した。このことと関わる一番の原因は、言うまでもなく 1931 年 9 月 18 日に起こった満州事変である。

1931 年 9 月 18 日、日本関東軍が奉天（今の遼寧省瀋陽市）郊外の柳条湖に鋪設されていた南満州鉄道を爆破し、このことを口実に軍事活動を始め、約 6 カ月後に満州全土を占領した。満州事件は日中関係の破局をもたらし、中国に抗日の風潮を巻き起こした。この風潮の中で、日本文学作品の翻訳は厳冬期を迎えた。劉春英（1989）の統計によると、1920 年代から満州事変までに中国で日本文学作品の翻訳が 130 種出版されたが、満州事変から盧溝橋事件までは 50 種に激減し、新聞での掲載も大幅に減少した。[12]

ところが佐藤春夫の作品は雑誌や新聞から消えたが、単行本の出版がほとんどこの時期に集中している。

1933 年 8 月に高明訳『佐藤春夫集』が現代書局より出版された。この作品集には「星」「开窗（窓展く）」「阿絹及其兄弟（お絹とその兄弟）」「一夜宿（一夜の宿）」「瀬沼氏的山羊（瀬沼氏の山羊）」が収録されている。この内「星」と「一夜の宿」以外はそれまで中国語に訳されていなかった作品だが、「お絹とその兄弟」は「一夜の宿」の中で言及されているので、その前既にある程度認知されていると考えられる。本の冒頭には佐藤春夫がこの中国語訳集のために書き下ろした序文が附されている。序が「拝復。お手紙拝見」から始まっていることから、高明が予め佐藤春夫に条文を依頼する手紙を送っていたことが分かる。続いて佐藤春夫は「君の尽力によって、私の作品が平素敬愛の念を持つ中国語－世界文明史においてはギリシャ語と並ぶ光栄の文字－に翻訳され、中国の読書界に紹介されることは何より嬉しい」と感謝の意を述べた。ここで佐藤春夫が自分の作品が使った「中国の読書界に紹介される」という表現から、彼は「星」と「一夜の宿」の中国語訳が既に存在していることを知らなかったと推測される。そして佐藤春夫は収録作品が「適切な標準」によって選択されたと褒めながら、「拙作の手法と題材はやや旧時代風なもので、技法も少年だった頃のもので、君の尽力によって翻訳されたことは幸いだが、貴国な先鋭な読者と批評家諸君の得られるかは不安を禁じ得ない」と述べている。[13]1930 年代の中国文壇の主流はモダニズム文学とプロレタリア文学だったので、佐藤春夫が自分の前期作品の抒情的な作風が受け入れられないという心配を抱くことは不思議ではない。

そして佐藤春夫の不安に答えるように彼をはっきりと「没落の作家」だと定義づけたのは彼の旧友田漢である。1934 年 7 月に田漢が李漱泉というペンネームを使って訳した『田園の憂鬱』が中華書局より出版された。この翻訳集に「田園之憂鬱（田園の憂鬱）」、「阿絹和她的兄弟（お絹とその兄弟）」、

「殉情詩集」の三作が収録されており、作品の前に田漢による長い「佐藤春夫評伝」が附されている。この評伝の中で、田漢は限られた材料を用いつつ佐藤春夫の芸術をその優れた批評眼で解剖して見せた。まずは佐藤春夫の作品を翻訳する理由を説明した。前述のとおり、田漢は「一旧友」を読んでから佐藤春夫を敬遠したが、1931年春に南国社が国民政府に取り締まられてから不安定な生活を送った際に佐藤春夫の作品をしきりに読むようになり、佐藤春夫に対する不満も「作品と朝夕相対しているうちに消えていった」と田漢が述べている。

田漢の佐藤春夫論の中でもっとも注目すべき点は、その退廃の中から生命力を見出す点である。田漢はまず1930年代に入ってから佐藤春夫と彼の感傷の文学はすでに「没落」を免れぬと述べている。

> 『都会の憂鬱』（一九二二年）の発表からまた十年がたった。この十年の間に旧社会が急速に崩壊し、新社会は堅実な基礎を築き、このような転換の中で文学の傾向も自然と急激な転換を果たした。新時代の作家たちは佐藤春夫と真逆なことを考えるようになった。この転換は誰の繁盛をもたらすのかは答えられないが、佐藤春夫の没落はすでに定められたことである。これはまさに彼が復誦したその友人の批評が述べるように、
>
> 「お前の全生活にはデケイした面白味があるよ－お前は敗滅した人間だからね」（都会の憂鬱）。[14]

ここでの田漢の指摘の背景にある新旧転換を果たした社会は無論中国社会のことである。中国文壇において1920年代後半から起こったプロレタリア文学運動が1930年の左翼作家連盟の結成を促し、多くの文学者が社会と積極的に関わりつつ創作することを選んだ。このような風潮の中で、佐藤春夫の憂鬱に満ちた感傷的な作風は自然と棄却の対象になった。佐藤春夫の作品が1931年以降に新聞や雑誌から姿を消したのは満州事変の影響だけでなく、このような文壇の潮流によるものでもあると考えられる。

しかし田漢は単に佐藤春夫の頽廃さを指摘しただけではなく、彼の作品から隠された生命力を見出している。

> 私は自分のロマン主義を捨てることにした。よってロマン主義作家の作品を以前のように熱心に読むことができなくなった。しかし佐藤春夫の『女誡扇綺譚』を訳してから、私はある理由でこの浪漫主義作家に新たに興味を持つようになった。これまで私にとっての佐藤春夫は病的で頽廃的な、虫に蝕まれた花のように咲く前に枯れたような作家で、彼の描く家屋図のように現実の分子が少ないのである。ところがこの作品はなんと現実的で若々しい精神に溢れていることだろうか。それが個人主義の上に成り立つものとはいえ、全ての新興階級に必ず必要な精神である。[11]

というふうに、共産主義に転じて社会変革を図る田漢は、その目的を果たすための「現実的で若々しい精神」を佐藤春夫の作品から見出した。この評価は無論田漢本人の政治傾向によるところが大きいが、「憂鬱」、「頽廃」などの特質の裏に隠された佐藤春夫作品の生命力に溢れる一面を見出すところに価値があるといえよう。

1935年、査士元の兄弟で彼と同じく上海東亜同文書院で日本語を学んだ査士驥が訳した『更生記』

が中華書局より出版された。佐藤春夫による原作は1929年5月27日から10月12日にかけて『福岡日日新聞』に連載され、全130回にわたる長編小説である。査士驥による翻訳が出版されたのが1935年のことであるが、訳者序の最後に1930年に書き下ろしたと記してあるので、査士驥は原作が発表された後間もなく翻訳に着手し、1930年頃に完成したか可能性が高い。査士驥の訳者序によれば、彼が『更生記』を翻訳したのは「詩人であり現状に甘んじない老作家」の佐藤春夫が「フロイトの心理分析法を基礎にして」書いたこの作品が「月並みな長編小説」と違うからである。

以上のように、田漢が佐藤春夫作品のプロレタリズムと共通する生命力の溢れる一面に着目したのに対し、査士驥が『更生記』を訳したのはのモダニズム的手法に引かれた。しかし二人の訳者は当時中国文壇の二大主流に立って佐藤春夫に対する再認識を試みたが、1920年代の中国に広く知られた「詩人」としての佐藤春夫はすでに時流に呑み込まれた。

おわりに

以上の考察を経て、戦前における佐藤春夫作品の中国語訳の実態がある程度明らかになったと思われる。そして第一節で挙げられた二つの問題に対しても、以下のような答えが見出された。まず佐藤春夫作品が1920年代に入ってから中国語に翻訳されたのは、まず彼自身が台湾旅行の際に創作した「外地物」によって中国文壇で好評を博したからと考えられる。そして1920年代の訳者が周作人の知人や学生である場合が多く、そうでなくても佐藤春夫に対する評価などで彼の影響を受けていると思われる場合が多いので、戦前の佐藤春夫翻訳は周作人の影響下で行われていたといっても過言ではない。また1927年の佐藤春夫の江南旅行や、1930年の「細君譲渡事件」も結果的に翻訳に拍車をかけることになったと思われる。最後に佐藤春夫作品が1931年代以降に入ってから新聞や雑誌から消えたのは、一方では満州事変による日中関係の悪化が原因で、他方では中国文壇の主流がプロレタリア文学とモダニズム文学に転向したことにも影響されていると考えられる。

本稿は戦前中国における佐藤春夫作品の翻訳について考察したが、民国期における佐藤春夫作品の中国訳の全貌を掴むには戦時中の作品翻訳がまだ問題として残っている。以上に述べたように、中国における佐藤春夫作品の翻訳活動は1930年代に入ってから衰えたが、終戦へと近づく1944年頃に佐藤春夫の作品は突然集中的に訳出されるようになった。この時期の翻訳は、戦時中における日本占領区の文化政策や対中国宣伝戦略などと関わる複雑な問題であるため、今後稿を改めて考察したいと思う。

注釈

1）新聞と雑誌は「全国報刊索引」（https://www.cnbksy.cn/）、書籍は「中国歴史文献総庫」（http://mg.nlcpress.com/library/publish/default/Login.jsp）のデータより整理した。

参考文献

1．王向遠著『二十世紀中國日本文學翻譯史』、北京師範大學出版社、2001年3月

2．翁家慧、「中國文壇對日本唯美主義的譯介與接受 ― 以民國時期田漢、鬱達夫及周作人為例」、『日語教育與日本學』2018（1）、2018 年 1 月
3．荊紅艶、「論田漢對外國文學的譯介」、『哈爾濱師範大學社會科學學報』2016（7）01、2016 年 1 月
4．佐藤春夫作、仲密訳「雉雞的燒烤」、『民国日報』1921 年 7 月 15 日号
5．佐藤春夫作、鳴田訳「初春底一日」、『民国日報』1921 年 9 月 9 日号
6．佐藤春夫作、仲密訳「形影問答」、『晨報副刊』1922 年 1 月 8 日号
7．夏目漱石著、張我軍訳『文学論』、神州国光社、1931 年 11 月、pp.2 ～ 3
8．佐藤春夫作、湯鶴逸、「李鴻章」、『晨報副刊』1926 年 9 月 27 日号
9．佐藤春夫作、田漢訳「從佐藤春夫的殉情詩集」、『中央日報特刊』1928 年 2 月 29 日号
10. 佐藤春夫作、張我軍訳『星』、『河北民国日報副刊』1929 年 6 月 11 日～ 17 日号
11. 佐藤春夫作、馮厚生訳「厭世家的誕生日」、『南開双週』（第六巻第一期）、1930 年 8 月、pp17 ～ 26
12. 劉春英、「抗戦時期中国的日本文学翻譯」、『日本研究』1989（1）、1989 年 4 月、pp.82 ～ 86）
13. 佐藤春夫作、高明訳『佐藤春夫集』、現代書局、1933 年 8 月、pp.1 ～ 2
14. 佐藤春夫作、李漱泉訳『田園之憂鬱』中華書局、1934 年 7 月、pp.19、pp.50

附記　本稿の引用文は全て筆者訳である。

Translation, and Introduction of Haruo Sato's Works in China
— Focusing on Pre-war Period (1921 ～ 1937)

Li,Tianran

Since the late 1910s, Haruo Sato has become a representative romantic writer in Japan. Sato's works had a great impact on Chinese writers studying in Japan around 1920. In addition, Sato's works have been translated into China by Zhou Zuoren since 1921, and a large number of translations have been produced in the following fourteen years. This paper draws the following conclusions by investigating the translation of Haruo Sato's works in China before the war. First of all, most of the translators who translate Sato's works are close to Zhou Zuoren. Sato's works have disappeared in Chinese newspapers since 1931. Apparently this is mainly because the Manchukuo incident, but another possible reason is the mainstream of Chinese literature has changed into modernist and Communist literature after 1930.